

日英語における愛称語形成について

太田正之

On Hypocoristic Formations in Japanese and English

Masayuki Ota

はじめに

愛称 (hypocorism) あるいはニックネーム (以後、総称して「愛称語」とは一般に、人の名前から一部を取り出し、必要に応じてさまざまな操作を加えて作り出される。もちろん名前を利用することなく、人の習性・外貌・特技・特異性などに基つき、「がいこつ」や「にんじん」などという表現が愛称語として使われることもある。¹ 本稿では前者の形式、つまり名前の一部を取り出し作られる愛称語のみを考察の対象とする。² 日本語における代表的な愛称語が(1)のようなものであることに異論はないであろう。

- (1) a. はるか → <はる> ちゃん
b. はるな → <はー> ちゃん
c. なつみ → <なっ> ちゃん
d. まさお → <まー> ちゃん

(1a) では名前の最初の二文字分が取りだされ、それに「ちゃん」が付加される。(1b) では名前の最初の文字を切り出し、切り出した音節の母音部分を引き延ばし二文字分とした後で(1a)同様に「ちゃん」を付与する。(1c) では音の取り出し方は(1b)と同じであるが、二文字分にする方法は異なり、詰まった音(「っ」という促音)に変えたりすることで長さを調整している。このようにしてできあがった愛称語は四文字(モーラ)分の長さを持つ。³ この四文字分という長さが「ちゃん」を含む愛称で許される最小形式であるといえる。という

のも(2)の各例が示すように1モーラを切り出してそのまま「ちゃん」を付け加えただけの3モーラ形式は、全て不適格となってしまふからだ。⁴

- (2) a. * <め> ちゃん
b. * <ち> ちゃん
c. * <え> ちゃん
d. * <ま> ちゃん

一方、英語においては愛称語はどのように形成されるのだろうか。*Elizabeth* を例として考えてみよう。⁵

- (3) a. Lisa, Liza, Libby, Liddy, Lizzy, Liz
b. Betty, Betsy, Beth, Bess

(3a) では、強勢が置かれているという点で最も卓立した音節を中心にして名前の一部が取り出され、愛称語によくみられる接尾辞-yが付加されたり、あるいは手を加えずそのままの形で愛称語が形成されている。これに対し(3b)では語末音節がそのまま抜き出されたり、音節主音である母音はそのままに、末尾子音のみに調整が施されたりして愛称語が作られている。先に見た日本語の愛称語、特に「ちゃん」のつく形式では2モーラという長さ制限があったが、英語にも愛称語を作り出す上で守らなければならないような条件があるのだろうか。(3)のなかで最も短い愛称語である *Liz*, *Beth*, *Bess* に基づけば、(短)母音のあとに子音一つからなるものが最小であるといえよう。つまり単一音節で末尾子音を最低一つ持てば良いということに

なる。これに従えば末尾子音を持たず短母音でおわるような *Li, *Be など是不適格なものとして確かに排除はできる。しかし英語の愛称語に課せられる「単一音節で末尾子音を最低一つ持つ」という制約と、日本語の「2モーラ」制約の間に接点あるいは共通点はないのだろうか。あるとすればどのようなものなのか。本稿の目的はこの間に答えることである。次節では日本語の愛称語形成のいくつかのパターンを取り上げ、そこで働く規則性について論じる。2節では英語の愛称語を観察し、形成上どのような制約が課せられるかを考える。3節は、愛称語形成に関わる日英語の制約を比較検討し、より一般的な制約を模索する。最終節は本稿のまとめである。

1. 日本語における愛称語形成パターン

前節では日本語における最も一般的といえる愛称語形式である「・・・ちゃん」というパターンをとりあげた。この形式以外にどのようなパターンが存在するのであろうか。本節ではさまざまなパターンの愛称語形式を考察しながら、長さにかかわる制約について論じる。森岡・山口(1985)は次に示すような愛称語形式、つまり名前の一部に各種の接辞を付加する形式があると指摘している。⁶⁾

(4) 接辞パターン 実例

お・・・	お けい <u>く</u> けいこ (恵子)
お・・・さん	お たこ さん <u>く</u> たかこ (多佳子)
・・・(っ/ん)こ	よっ こと <u>よ</u> しみ (好美)
・・・(ん)た	のん た <u>く</u> のえみ
・・・(っ)ち	ゆっ ち <u>く</u> ゆかり
・・・(っ/ん)ちよ	おだ ち <u>く</u> よ <u>く</u> おだざり
	(小田切)
・・・(っ)べ	もが んち <u>く</u> も <u>が</u> み (最上)
・・・吉(きつ)つあん	かよ っ <u>く</u> べ <u>か</u> よ (佳代)
・・・公(こう)	とも 吉 <u>つ</u> あん <u>く</u> ともこ (朋子)
・・・すけ	りえ 公 <u>く</u> りえ (理恵)
・・・ちゃ	ちい すけ <u>く</u> ちえこ (千恵子)
・・・ちん	ひと ちゃ <u>く</u> ひとし (等)
・・・どん	よっ ちん <u>く</u> よ <u>し</u> こ (芳子)
・・・びん	まさ どん <u>く</u> まさみ (雅美)
	けい びん <u>く</u> けいこ (恵子)

・・・や	みい や <u>く</u> みちよ (実千代)
・・・くん	たっ くん <u>く</u> たかし (隆)
・・・さん	みい さん <u>く</u> みゆき
・・・たん	みい たん <u>く</u> みわこ (美和子)
・・・つあん	よっ つあん <u>く</u> よ <u>つ</u> もと (四正(名))
・・・のん	さえ のん <u>く</u> さえこ (貴恵子)
・・・べべ	さゆ べべ <u>く</u> さゆり (小百合)
・・・坊	ちい 坊 <u>く</u> ちえこ (千恵子)
・・・りん	きよこ りん <u>く</u> き <u>よ</u> うこ (京子)
・・・やん	さあ やん <u>く</u> さ <u>や</u> ま (佐山(苗字))

上の例では‘く’の右側に本来の名前あるいは苗字のよみがなを、その下に施した線は愛称語形成で取り出された音(文字)をそれぞれ示している。(4)の各形式では名前から一文字、あるいは多くの場合二文字が取り出され、同じ母音を重ねたり、促音や撥音を加えるなどの調整を受けそれぞれの接辞を付加され愛称語が形成されている。このように名前から取り出される音(文字)の数は全ての形式で同じわけではないが、取り出されるのは名前に含まれているそのままの音である。しかしながら漢字を使う日本語ならではの愛称語形式もある。⁷⁾

(5) めぐちゃん	<	けいこ (恵)
すずちゃん	<	りん (鈴)
むっちゃん	<	ろく (六)
がんちゃん	<	いわお (岩)
しょうちゃん	<	てるお (照)
ぶうちゃん	<	たけし (武)

(5)の各例は、名前として使われている漢字の一部、もしくは音から連想される漢字の読み方を変えて得られる音に接辞を付加して作られている。これらの愛称は(1)でみた例と同じ接辞を持っており、最後の名前から「*ぶちゃん」という愛称を作り出すことはできないので、「ちゃん」に先行する部分は2モーラであるという長さ制限も(1)の場合と同じようにここでも働いているようである。また当然のことながら、漢字の読みを操作せずにそのままの音を使って愛称語を作れば(6)のような形式となる。

(6) けいちゃん	りんちゃん	ろくちゃん
いわちゃん	てるちゃん	たけちゃん

ここで「・・・ちゃん」というきわめて一般的な愛称語に焦点をあて、この形式にみられる

いくつかのパターンを確認しよう。Poser (1990)が指摘するように、まず名前に接辞が付加されるだけの(7a)、名前の最初の2モーラが取り出され接辞が付加される(7b)、名前の任意の位置から2モーラ抜き出し接辞を付加して作られる(7c)、語頭モーラを取り出し母音を長音化して作る(7d)、語頭の二モーラが選ばれ、さらに二つ目のモーラが促音化を受けて作られている(7e)と多様である。なお名前を構成する各モーラのなかで愛称語に取り込まれた部分をはっきり示すために、該当箇所

- (7) a. masao → masao-tyan
 b. ayako → aya-tyan
 c. akiko → ako-tyan
 d. hiroko → hii-tyan
 e. etuko → et(etu)-tyan
mitiko → mit(miti)-tyan
yasuko → yat(yasu)-tyan
natuko → nat(natu)-tyan

ここで問題となるのは(7e)である。というのもこの形式に関しては(8)が示すように、二つの分析が可能であるからだ。最初の分析は、語頭モーラだけが取り出されて、「っちゃん」(e-tyan)が付加されているというものである。語頭の一モーラだけを抜き出すことは(7d)にみるように可能である。二つ目は、最初の2モーラが抜き出され、接辞付加後に母音脱落、子音同化などが起こり、その結果として促音化するという分析である。

- (8) a. etuko → e-tyan
 b. etuko → et(etu)-tyan

それではどちらが妥当な分析といえるだろうか。後者の分析の方が優れていると思われる。なぜなら、まず(8a)の分析では接辞部分を他の愛称語に付加されている「ちゃん」とは違う形式を仮定しなければならず、共通性がとらえられないこと。また、ごく親しい間柄での呼びかけ、親が子どもを呼ぶ場合などにおいては、愛称語の接辞が省略され、語幹とも言うべき要素のみになることがある。

- (9) けいちゃん < けい
はるちゃん < はる
さきちゃん < さき

- けんちゃん < けん
 めぐちゃん < めぐ
 かなちゃん < かな

(7e)においても接辞を省略した形式は可能である。しかしながら(8a)の分析に従った場合は接辞省略は不可能である。⁸

- (10) etu miti yasu natu
 *e *mi *ya *na

(7)の他のパターンでも接辞 tyan を省くことは可能である。

- (11) masao-tyan → masao
aya-tyan → aya
ako-tyan → ako
hii-tyan → hii⁹

従って(8b)の分析が他のパターンとの共通性を正しく捉えることができるという点で妥当な分析といえる。

これまで多様な愛称語形成法の中から、名前の一部を取り出し接辞を付加して愛称語を形成する方法を観察してきた。とくに「っちゃん」という日本語の代表的な愛称語パターンでは、接辞が付加できるのは2モーラ以上の長さを持つ要素だけであることを確認した。また同じ愛称語パターンから接辞を取り除いた形式にも、2モーラという長さ(大きさ)制限が働いていることをみた。

2. 英語における愛称語形成

英語の愛称語形成方法も日本語と同じように多様であり、本稿でその全てを扱うことは不可能であるので、ここではすでに(3)でみたような名前の一部を取り出し作られたもの、また取り出した要素に接辞などを付加したものを考察の対象とする。まずKenstowicz (1994)に従い次の例から検討してみよう。なお左側の名前に付された下線部は語強勢の位置を示している。

- (12) a. *Name* *Nickname*
 Jennifer Jennie
 Abigail Abbie
 Madeline Maddie
 Penelope Pennie
 Rebecca Beckie
 b. Margaret Margie

Amanda	Mandie
Patricia	Pattie, Tricia
Victoria	Vickie (=Vicki, Vicky)
Jacqueline	Jackie

(12a) の左側のあるほとんどすべての名前は、それぞれ子音ひとつに母音ひとつという最も基本的な音節から構成されている。そのような名前の最も際立っている部分、ここでは語強勢のおかれた音節か語頭音節のいずれかとそれらに後続する音節の頭子音 (onset) が取り出され、英語のつづり字法にあうように調整され後に指小辞 (diminutive) *-ie* が加えられて、右側の愛称語が作り出される。(12b) の場合も基本的に同じプロセスとなる。ただ取り出される際に母音に後続する子音の数が若干違う。(12a) では後続音節の頭子音ひとつが取り出されていたが、(12b) では二つの子音を取り出されているものもある。この違いは何を意味しているのか。

次に子音の数の違いがどこから来るものなのかを明らかにするために (13) により音節構造を確認しておく。ピリオド (.) は音節境界を、角括弧 ([]) は抜き出される部分、丸括弧 (()) は名前の音節構造をそれぞれ表している。

(13) a. Jennifer ([cv.cjv.cv])	Jennie [cvc] + ie
Abigail ([y.cjv.cv])	Abbie [cvc] + ie
Madeline ([cv.cjv.cvc])	Maddie [cvc] + ie
Penelope ([cv.cjv.cv.cv])	Pennie [cvc] + ie
Rebecca (cv.[c]v.cjv)	Beckie [cvc] + ie
b. Margaret ([cvc.cjv.cv])	Margie [cvc] + ie
Amanda (v.[c]v.cjv)	Mandie [cvc] + ie
Patricia ([cv.c]c]v.cv)	Pattie [cvc] + ie
Patricia (cv.[cc]v.cv)	Tricia [ccvc]
Victoria ([cvc]c]v.cv)	Vickie [cvc] + ie
Jacqueline ([cv.c]c]v.cvc)	Jackie [cvc] + ie ¹⁰

上記の愛称語形成に共通しているのは、名前から抜き出される部分、つまり接辞が付加される段階では CVC か VC、またもうひとつ子音が続く CVCC という音節構造をしているということである。この VC あるいは CVC (以下、(C) VC) という音節構造が愛称語形成における接辞付与の条件となりそうである。

(14) 英語の愛称語が接辞を含む場合は、接辞に先行する要素は少なくとも (C)

VC からなる音節を含んでいなければならない。

(13a) の愛称語は (14) の制約を満たすために、音節境界を越え後続音節の頭子音を抜き出さなければならない。一方 (13b) の *Margaret, Amanda* などでは強勢のある音節がすでに CVC 構造を持っており、(14) の条件を満たしているのだがさらに後続音節の頭子音まで取り込んでいる。では (14) を満たしさえすればどのような形式も許されるのだろうか。

Kenstowicz が指摘するように制限は存在する。たとえば *Albert* の愛称語としては *Bertie* は許されても **Lbertie* は不可能である。後者は音節内で音が並ぶ順番に制限を課す「きこえの制約」に違反する頭子音を含んでいるから排除されるのである。(14) の制約に違反していなくとも、適格な音節でなければならないのである。尾子音も同様である。Kenstowicz は *Jacqueline* (/kw/) *eline* の愛称として *Jacquie* (/kw/) はおかしいと指摘しているが、これは尾子音として許されない子音結合を含んでいるからに他ならない。この制限は *Helmut, Zygmunt* のような英語でない名前から愛称語を作り出す場合にも適用される。

(15) Helmut ([cvc.c]vc)	→	Helmie [cvc] + ie
Zygmunt ([cvc.c]vcc)	→	Zyggie [cvc] + ie
Zygmunt ([cvc.c]vcc)	→	*Zygmie [cvc] + ie

**Zygmie* が不可能であるのは、CVCC 構造それ自体に問題があるのからではなく、尾子音 /gm/ が適格な尾子音ではないからである。したがって (14) の制約は当然のことながら英語の音節、ある場合は自然言語の音節として許容される範囲でという制限がつくのである。

(14) は接辞以外の要素が持つべき音節構造、別な言い方をすれば接辞に先行する要素の長さを規定したものであるが、そもそも接辞を持たない愛称語に関しては何の制約もないのだろうか。先に日本語では接辞をもたない愛称語にも、2モーラとい長さ制約が存在することをみた。ここで英語の例をみてみよう。

(16) Al [vc] (<Albert)	Abe [vc] (<Abraham)
Nick [vc] (<Nicholas)	Bob [vc] (<Robert)
Dick [vc] (<Richard)	Bill [vc] (<William)
Beth [vc] (<Elizabeth)	Dan [vc] (<Daniel)

Ben[cvc](<Benjamin) Jack[cvc](<John)
Bert([cvcc] (<Albert)

音節構造からいえば (13) の接辞付きの愛称語となんら変わるところはないのである。VC, CVC, CVCC というように母音の後に少なくとも一個の子音が続いており、(14) の「少なくとも (C) VC からなる音節を含んでいなければならない。」という制約は、接辞をもたない愛称語形成にも課せられているのである。以上英語において、指小辞などを含む愛称語と、接辞を持たない愛称語ともに、その形成過程において (C) VC という制約が愛称語もしくはその一部の音節に課せられるあることを観察した。

3. 愛称語と最小語制約

これまで日英語の愛称語形成過程において一定の制約が働いていることをみた。つまり日本語では二モーラ、英語では (C) VC という単位が大きな役割を果たしているのである。本節では日英語の他の語彙形成に考察対象を広げ、類似の制約があるかどうか考えたい。

まず日本語における借用語短縮を見てみよう。¹¹

- (17) ストライキ ([sutojraiki]) → スト、*ス
ロケーション ([ro.kej.esjon]) → ロケ、*ロ
ビルディング ([bi.ru.di.n.gu]) → ビル、*ビ
パンフレット ([pan.hu.ret.to])

→ パンフ、*パン、*パ

このような外来語の短縮形では最低でも 2 モーラの長さが要求され、1 モーラの長さしか持たない短縮形は不可能である。また Poser (1990) や 窪 蘭 (1998) が指摘するように、名前の一部を愛称語として取り出す場合でも、その長さが 1 モーラである場合にはその形式は許されない。

- (18) こばやし → こば、*こ
のむら → のむ、*の
やなぎば → きば、*ぎ、*ば

以上のことより、1 モーラの長さを持つ語を禁ずるために Ito (1990) は次の最小語制約を提案している。

- (19) *Word
|
μ

単語は 1 モーラ (μ) の長さであってはならないという制約であり、単語であれば最低でも 2

モーラの長さを持つということである。¹² 愛称語に関して言えば、「ちゃん」や「くん」のような接辞の前にくる要素の長さに関しても、接辞のない愛称の長さに関しても (19) が同じように働いているということになる。しかしながらこの制約は既存の 1 モーラ語には当然のことながら適用されない。適用範囲は派生語に限られる。¹³

英語には (19) に相当するような最小語に関する制約はあるのだろうか。次のような短縮語が参考になるであろう (窪 蘭 1998)。

(20)

lib (eration)	pro (fessional)	prof (essor)	champ (ion)
[cvc]	[ccv]	[cvc]	[cvcc]
exam (ination)	lab (oratory)	ad (vertisement)	
[vccvc]	[cvc]	[vc]	
fan (atic)	info (mation)	chimp (anzee)	
[cvc]	[vccv]	[cvcc]	
(air)plane	(omni)bus	(news)paper	(cara)van
[ccvvc]	[cvc]	[cvvcv]	[cvc]
(in)flu(enza)	(re)fridge(rator)		
[ccv]	[ccvc]		

() の部分は省略される部分である。角括弧の中は音節構造を表している。また [vv] は二重母音や長母音である。ほとんどの省略語は母音の後に子音が少なくとも 1 個あり、(13) や (15) などの愛称語に適用される制約 (14) を満たしている。また V で終わっている語では、その母音は二重母音か長母音である。子音で終わる音節も、二重母音や長母音で終わる音節も、どちらも重い音節 (heavy syllable) と呼ばれ、語強勢の位置を決定する際に重要な働きをすることは良く知られている。また (16) では指摘できなかったが、接辞を含まない愛称語 *Diana* をもとにした *Di*[cvv] という二重母音で終わる形式があり、許される音節のタイプは短縮語とおなじことになる。これまでの議論を踏まえると制約 (14) は (21) のように修正すべきであろう。

- (21) 接辞を含む愛称語では接辞に先行する部分、接辞を含まない愛称語では愛称語それ自体、短縮語形成過程により派生された短縮語はいずれも、少なくともひとつの重音節を含んでいなければ

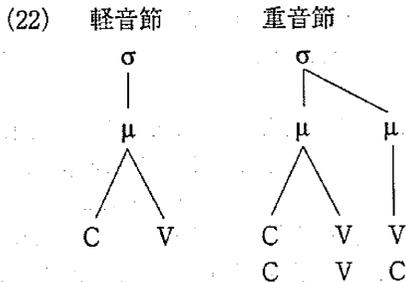
ならない。

こうすることで英語の愛称語形成と短縮語形成に見られる共通性をうまく捉えることが可能となる。

4. まとめ

これまで日英語の愛称語形成をとりあげ、その形成過程においてどちらの言語も長さに関する制約を持つことをみた。英語では重音節を要求する制約、日本語では2モーラ以上であることを求める制約が関わっていた。これらの制約は、愛称語形成にだけ関わっているわけではなく、日本語では(17)の借用語短縮、英語では(20)のような短縮語形成においても機能していることをみた。

ここでの議論をさらに進めて、音節にもモーラという概念を導入することで軽い音節と重い音節の違いを明確にできる(窪園1998)。つまり(22)のような構造を想定するのである。



この提案によればCVという軽音節が1モーラであり、それに子音や母音要素が加わったものは2モーラということになる。このように考えることで日英語の愛称語形成に関わる共通性もモーラという単位を通じて記述できることになる。

注

1. 愛称の分類に関しては大塚・小西(1973)や森岡・山口(1985)などを参照。
2. 「ちゃん」を含む表現に、名前の一部ではなく、名前に「ちゃん」を付加しただけの愛称語、例えば「たかしちゃん(くたかし+ちゃん)」のようなものがあるが、要素の取り出しや、促音化・長音化などの調整操作が関与していないために本稿では直接的な考察対象とはならない。
3. 以後、かな一文字分の長さを示す単位として「モ

ーラ」という用語を用いることにする。促音「っ」、撥音「ん」や長音「ー」のような特殊モーラも同じ長さをもつと仮定する。

4. 例に付された(*)は不可能な形式であることを示す。以下の例においても同様。
5. 例はPinker(1999)によるもの。
6. 森岡・山口(1985)では名前ではなく苗字に接辞を付けたあだ名として次のようなパターンが指摘されている。
 - ・・・ごん よねごん < 今米
 - ・・・ら がもら < 岡本(おかもと)
 - ・・・さく すぎさく < 杉本
 - ・・・べえ むらべえ < 村井
7. Poser(1990)からの例。
8. yasu, natuの自然さに比べると etu, miti はやや不自然か。愛称語においては語呂の良さも重要であるとの指摘が原田(1996)にみられる。
9. 上で指摘したとおり、hii はあまり語呂が良くないようである。mii-tyan から接辞を省略した mii (ミー)の自然さと対照的である。
10. Kenstowicz は *Jacqueline* が /dʒækwəli:n/ であることを前提にしているが、最近の発音では /w/ が入らない方が一般的である。たとえば(Wells 2000)。
11. 用例は Ito(1990)によるもの。
12. もっといえば日本語では2モーラが一つの韻脚(foot)という韻律単位を形成し、愛称語形成やさまざまな短縮語形成、ある種の業界言葉形成において重要な働きをしている。詳しくは Mester(1990), Poser(1990), Kubozono(2003)などを参照のこと。
13. 規則の適用に関して派生語と非派生語が異なる振る舞いをすることは決して珍しいことではない。たとえば名詞の複数形に関する規則は、*mouse* や *goose* のような語彙項目には適用されず、それぞれ *mice*, *geese* という特異な複数形を持つが、他の要素と結合し *Micky Mouse*, *Mother goose* などの派生形(複合語)になると、一般の複数形規則が適用され、*Micky Mouses*, *Mother geeses* となる(Ito 1990)。類例として *Walkman* の複数形についてはPinker(1999)を参照。

参考文献

- 大塚高信・小西友七編. 1973. 『英語慣用法辞典改訂版』三省堂。

- 原田龍二.1996. 「[キムタク] 愛称語の許容度について」 音韻論研究会編『音韻研究—理論と実践』 開拓社.
- Ito, Junko.1990. Prosodic minimality in Japanese. *CLS26-II, The Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, 213-239. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- 窪園晴夫.1998. 「音韻構造の普遍性と個別性」 窪園晴夫・太田聡『音韻構造とアクセント』 研究社、1-108.
- Kubozono, Haruo.1999. Mora and Syllable. *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Natsuko Tsujimura, 31-61, Blackwell.
- Kubozono, Haruo. 2003. The Syllable as a Unit of Prosodic Organization in Japanese. *The Syllable in Optimality Theory*, ed. by Caroline Fery and Ruben van de Vijver, 99-122, Cambridge University Press.
- Mester, Armin. 1990 Patterns of Truncation, *Linguistic Inquiry*, 21, 478-85
- 森岡健二・山口仲美.1985. 『命名の言語学』 東海大学出版会.
- Pinker, Steven. 1999. *Words and Rules : the ingredients of language*. Perennial.
- Poser, William J.1990. Evidence for foot structure in Japanese. *Language*, 66, 78-105.
- Tsujimura, Natsuko.1996 *An Introduction to Japanese Linguistics*. Blackwell.